OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	物語としての「家」…パーソナル・ヒストリーに見る日常世界の解釈
Author(s)	橋本, 満
Citation	大阪大学, 1994, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.11501/3075258
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【2】

氏　　名	橋本（はしもと）　満（みつる）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　11148　号
学位授与年月日	平成6年3月4日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	**物語としての「家」……パーソナル・ヒストリーに見る日常世界の解釈**
論文審査委員	（主査） 教　授　塩原　勉 （副査） 教　授　直井　優　　教　授　井上　俊

論文内容の要旨

データは，京都にある「伝統ある」市場とされている錦小路商店街の，三つの家での六人からの聞き取りによっている。インタヴューは，1980年の前後二，三年に集中的に行い，その後，十年以上にわたって，断続的に続けてきた。

パーソナル・ヒストリーは，近年，とくにライフ・コース論から見直され，方法論的な議論やデータの集積も盛んに行われるようになった。だが，この調査を始めた十数年前には，方法論的にはもちろん，社会調査のデータとしても，どれほどの意味を持つのか未確定であった。

聞き取り調査そのものは，古くから行われてきた。ただし，個人の歴史の事実確認や，質問紙による調査であった。この調査で試みたのは，open-ended interview と呼ばれる方法で，被調査者に対するコントロールをできるだけ抑え，自由に話してもらうようにしている。十年前はもちろん，現在でも open-ended の聞き取り調査は，時間と労力の点から，あまり行われていない。対象が語った生の言葉を直接にデータにするわけであるから，事実確認のためだけなら，非能率，非生産的である。利点は，生の言葉を通して，対象の抱いている価値観・世界観に直接ふれることができる点にある。断片的な事実ではなく，語られた言葉としての全体をデータ（物語としてのテキスト）とすることができる。

パーソナル・ヒストリー研究の多くは，個人の半生の出来事を通して，どのように社会との関わりを構成していくか，という観点からアプローチされる。家族や共同体という個人をとりまく社会との関係がいかに形成されていくか，というプロセスに焦点があてられる。関係の構成という動的なプロセスを問題にする点で，構造論的な発想をとるかつての構造機能主義の静態的な方法の限界を突破する，という意義をもっている。

この論文で採用するパーソナル・ヒストリーの方法では，さらに一歩進んで，個人のまわりの社会そのものも，じつは構成されるイメージの集積にすぎない，という観点をとろうとする。この観点は，インタヴューで得られた知見は単に「事実」というだけでなく，「事実」として人々が半生を語りながら再構成している「事実につしての評価」の集積である，という前提に通じる。事実としての個人の個々の体験は，半生という全体の中で位置づけ直され，さらに個人が関わる社会という全体の中で意味あるものとして描き直される。もちろん，社会も与えられた「存在」ではなく，個人が関わりをもつ中で，構成されている「全体」である。部分としての個人の体験としての個々の「事実」は，社会という「全体」の中で意味あるように語られているのだから，個はすでに全体を構成している。open-ended なインタヴューに方法としての意義を見出すのは，生の言葉が語られるままに物語としての全体を構成しているから

である。

「事実」として語られたテキストは，語った人々の日常世界についての「解釈」である。価値判断を含むことにより，解釈は一つの「世界」を描く。テキストは，事実を語っているようでいて，一つの倫理的表明となる。このような倫理的表明の中で，個々の事実は語られ，語られた全体は社会についての道徳的イメージの表現となる。社会そのものも与えられた事実的存在でなく，描かれた全体である。つまり人々は解釈することによって，自分たちを取り巻く全体を手に入れ，その全体の中での個々の出来事と自己のあり方を「再解釈」するのである。個から全体へ，全体から個へ，という解釈の循環はプロセスとして繰り返され，このプロセスそのものが人々の日常世界を構成する。本論文の方法の中心は，パーソナル・ヒストリーの中の事実を通して，構成されるプロセスにアプローチすることを試みる点にある。

序章は，人々が再解釈する彼ら自身の半生の「事実」がどのように成り立ちうるか，さらに，彼らの物語を再解釈する者として「事実」をどのように扱えばいいのか，という方法論的問題を論じている。

対象が描く事実は，レトロスペクティヴに語られる。過去の出来事は，語られる現在において意味づけられている。過去の時空が現在において再構成されている。つまり，語られている過去は「真実の過去」ではなく，語られている現在において「真実」なのである。個々の出来事は記憶の中にある過去なのだが，それらが位置づけられるべき全体は現在にある。そして，語られている現在は，インタヴューされる者としている者という関係で規定されている。さらに，インタヴューをしたわたし自身が，語られた過去を，十数年経った現在，レトロスペクティヴに再解釈するという，何重にも重ねられた「解釈学的循環」を，あえて方法論の中心においている。

リクールのように「ミメーシスの連続」が仮定されているのが解釈学的方法の常識であるが，この論文では，あえて「連続」を肯定せずに，語る者と聞く者の時空の差異，語られる過去と語られる現在との時空の差異，を強調して，いかなる「過去」がどのような「全体的地平」のもとで語られているか，という点を常に意識しようとしている。つまり，語られる事実は常にレトロスペクティヴであり，「過去」は常に語られる現在の価値的表出のために再解釈されている「事実」であり，さらにこの論文で彼らのパーソナル・ヒストリーを物語として再解釈するわたし自身の語り方を常に明らかにしておこうとする。

第一部の「男たち」は，街の歴史を語るところから始まる。物語の始まりである。「街の歴史」として伝統を強調する物語は，「現在の街の繁栄を永続させる」ために街の歴史を語り直すという語りである。街の歴史は繁栄の永続を語るために「伝統」として再構成され，伝統の継承という形をとる。

第二章「継承される家」は，「街の物語」を始めた二代目の若主人が，自分の家の歴史を街の歴史に重ね合わせて，伝統を継ぎ発展させようとする物語である。伝統は未来へ継承されることによって，現在を規定する価値規範の表現となる。

第三章「家の創設」は，戦後に店を起こし発展させた男の成功物語である。語りの中心に，伝統の継承が入り込む余地はないようである。街の伝統は，彼の商売の促進要因になるどころか，ときに阻害要因にさえなる。だが，裸一貫で成功した男が，成功は自分一人の力ではない，「皆のおかげ」という日常倫理で描き直して物語を締めくくる。自分自身で作り上げた男（self-made-man）として，現在の街が物語の基本枠組となっているのである。

第二部は，「女たち」の物語である。導入部である第四章「男がみる女の世界」は，「継承される家」の若主人が，母から妻へという女主人の継承を主題として描く女性像である。「女たち」の世界が「男たち」の世界の中で，あるいは補完的に，一つの全体を表わすという，男から見た「女の世界」を描く。第五章「家を作る女」は「継承される家」の初代の妻として，またじっさいに店を大きくしてきた女主人として，「家を作って」きた女の半生である。夫が兵隊にとられた間，一人で商売を大きくし「家を作った女」の物語となっている。二代目に家を継承させることまでを自分のシナリオとして描き，「家の伝統」を作っていく。

第六章「家を守る女」は，明治の初めから続く老舗に女主人になるべく嫁ぎ，戦争によって商売替えをしたために女主人の地位を継げず，さらに，家を五代目に引き渡すところで長男が死んでしまう，という物語である。この家の女主人と，この十年ほど，断続的にインタヴューを続けてきた。

この家の長男の死が，方法論的に大きな意味をもつ。長男の死によって，彼女の家の物語は，家の継承という輪を失い，わたしとのインタヴューを成立させてきた「語られ，語り返す」という解釈学的循環の輪も切られてしまった。

家は，語られ，語り直され，語り継がれ，という物語の中で継承されるはずであったのが，語り移され，継承されていくべき対象を失うと，単なる昔語りとなって再生の力を失ってしまう。現在において，人としてあるべき姿，家として続けられるべき姿，という「物語としての「家」」が人と人を結びつける力を失うと，「家」は継承の方向性を失い，語る人の世界は孤立してしまう。物語が規範的に事実を語らなくなってしまい，わたしに対しても語る力を失い，開かれているはずのテキストとしての家の物語は閉じられてしまう。

結語は，長男の死によって終わってしまった物語をきっかけにして，方法としての物語の終わりを位置づける。家と街の継承という語りは，過去を現在の中で語り直し，この過去から現在への物語を未来につなぐ物語なのである。「事実は絶え間なく語り直され，語り継がれ，未来での完成を目指す。語りの枠組みは現在における価値的表明であり，この現在という空間によって，過去・現在・未来という時間は「道徳的」に規定される。

ベラは「心の習慣」としてアメリカ社会の個人主義の伝統を描いている。この論文では，「物語としての「家」」は，「家の習慣」として社会における個人のあるべき姿を継承の物語として描く。

最後に，「物語としての「家」」が個人と社会との関わり方の一つの「道徳史」であるとするなら，社会学が「事実」として描いてきた近代社会の理論枠組も，近代社会とは何か，という全体を表明するための一つの「道徳史」ではないか，という批判的視角を提起して，この「家」の物語を締めくくる。

論文審査の結果の要旨

本論文は，京都市錦小路商店街の，三つの家の六人の個人のパーソナル・ヒストリー，すなわち，それぞれの語り手が家と街での半生の経験の解釈として語る物語を，聞き手である著者がさらに現在における解釈として語る物語という形に構成して記述したものである。六人の物語は差異とエピソードの多様性をもちながら，家と共同体の全体のイメージをつくりだしている。

本論文の特長の第一は，従来の実証科学の方法を用いた家族社会学から抜け出て，家族研究の新生面を開示したことである。この種の業績としては最初のものといってよいであろう。第二は，著者の記述が家と共同体の日常世界にかんする奥行きのあるモノグラフになっていることである。簡潔かつ周到なセンテンスの挿入によってまとめられる著者の解釈と記述は，それ自体，優れたライフ・コース論としても，あるいは優れた日本近現代家族史としても読むことができる。特長の第三は，本論文がパーソナル・ヒストリーを物語として解釈するという立場にたち，人びとの物語のなかから従来の社会学における近代社会理論とは異なる社会理論を顕出させようとするなど，その方法の適用に著者独自の工夫があることである。

以上，家族研究における積極的な貢献を評価し，本論文が博士（人間科学）の学位に十分に価するものと認定した。